日本エッセイスト・クラブ

会報

2020 夏

NO.71-III

第67回 日本エッセイスト・クラブ賞受賞！

ドリアン助川
線量計と奥の細道

2200円

「3.11」後の日本がどうなっているのか、
目と耳と足で確かめた路上の記録。
芭蕉の背中を追って、逡巡しながら、
生きる、ということを考えた日々。

書き下ろし　四六判上製 336頁

●最近の刊行書から

加賀乙彦 自選短編小説集
妻の死 3200円

柴田翔 中短篇集
岬 2200円

篠田正浩
卑弥呼、衆を惑わす 3600円

埋もれていた作品　文学の想像力

銀河叢書

◆小沼丹 作品

不思議なシマ氏 小説集
ミス・ダニエルズの追想 随筆集
井伏さんの将棋 随筆集
ゴンゾオ叔父 小説集

各 4000 円

幻戯書房
東京都千代田区神田小川町 3-12
TEL 03-5283-3934 ※価格は税別
http://www.genki-shobou.co.jp/

日本エッセイスト・クラブ

會報

2020 夏

題字　阿部　眞之助
表紙　よしだみどり
カット

目次

【エッセー】
「万葉集」と染め織りの手仕事　堀尾眞紀子　2
この欠落感　船木　拓生　5
宮澤賢治の恋と朗誦伴奏　澤口たまみ　8
窪田空穂の短歌　―枯れざる生命（いのち）―　臼井　和恵　11
難病「ＡＬＳ」を告知されて　井口　隆史　14
それが何か！で済まない　村尾　清一　17
　ここは日本！日本人！
上様（うえさま）とコロナウイルスに見る　大髙　英昭　20
日本のマスコミ　ドリアン助川　22
びっこ
【例会】
漢詩の楽しみ　市川　桃子　26
　―庾信の数奇な生涯―
「予防」より「ケア」へ　山本思外里　28
　―これからの認知症対策
会員近況　30
クラブ賞　2作品受賞決まる　33
定期総会　新会長に遠藤氏　34
日本エッセイスト・クラブ定款　42
会員名　44

エッセー

「万葉集」と染め織りの手仕事

堀尾　眞紀子
（会　員）

元号が「令和」になって以来、その出典とされる万葉集が、いっそう私たちの身近なものになった。

万葉集の魅力にふれると、その虜になるとよくいわれる。私もその一人。万葉集の専門家でも、古典文学研究者でもなく、著書はフリーダ・カーロをはじめ、近・現代の女性画家がほとんどで、この会の賞をいただいたのも『画家たちの原風景』だった。ところがいろいろなご縁で万葉集に取り憑かれ、今は臆面もなく、染織を軸とした市民向け万葉講座を、ここ四、五年続けている。

こんなに万葉集にはまり込んだのは、私が関わった二つの仕事がきっかけになっている。

一つは、もう二十年以上前になるだろうか、万葉集の研究拠点として奈良県立万葉文化館建設計画が立ち上がり、オープンまでの数年間、またその後の運営も含め、委員を務めさせていただいた。明日香での会議は東京からは少々遠いけれど、毎回いそいそと出かけて行った。委員長は中西進先生。会議が終わると、先生のお住まい近くの京都駅までをご一緒させていただいた。車中、先生がにこやかに語られるお話の中で、私はどれほど古代人の真っ直ぐでおおらかな生命力に、心震わせたことだろう。

二つ目は、ちょうど同じ頃、日本各地の伝統

的な染めや織りの手仕事を訪ねたことである。これは足かけ五年にわたり、月刊誌「ミセス」に連載した。結城紬、越後上布、黄八丈、芭蕉布…この仕事は毎回、新鮮な感動の連続だった。山形県赤崩の山岸幸一さんのお宅では、紅花紬を取材させていただいた。真夏の朝まだき、紅花の花を摘む。陽が昇ると棘が鋭くなり、昔は「嫁泣かせ」と言ったとか。続いての取材は雪に埋まる二月だった。零下十度を下回る深夜、紅花を発酵させた紅花餅での染めに入る。暖房はもちろん無い。空気が乾き、冴えた色を引き出すのに最も適しているとの山岸さんの説明に、私は凍えて歯の根も合わずただうなずくだけ。この染めを何度も繰り返し深い赤を出す。万葉集の、こんな歌が浮かんだ。

紅の　八入（やしほ）の衣　朝な朝な
なれはすれども　いやめづらしも

（紅の八回も染める衣のように毎朝毎朝、馴れてゆくけれども、いよいよ心惹かれることよ）

どうやら新婚さんの歌のようだ。

各地で取材を進め、その手仕事を目の当たりにするほどに私は胸が高鳴った。繊維となる草木の採集から、糸作り、機織りに至る地道な工程が、万葉集に詠われている内容と、ほとんど変わらないのである。北から南まで全国を巡る中で、その思いはますます確かなものになり、私は憑かれたように、万葉集四五〇〇余首中、染めや織り、衣服に託して詠われた歌を一首ずつ探し出していった。

堀尾眞紀子（ほりお・まきこ）

文化学園大学名誉教授。東京芸術大学美術学部、同大学院修了。フランス国立パリ美術工芸大学留学。奈良県立万葉文化館建設委員、運営委員、万葉古代学研究所客員研究員等を歴任。主な著書に『画家たちの原風景』（第35回日本エッセイスト・クラブ賞受賞、ＮＨＫ出版）『フリーダ・カーロ』（中央公論社）『フリーダ・カーロとディエゴ・リベラ』（ランダムハウス講談社）『絵筆は語る』（清流出版）『女性画家 10の叫び』（岩波書店）ほか多数。

結果は想像以上だった。色などの歌語を合わせると、その数、千九百首以上、約四割にものぼることが分かった。そこには麻の種を播くところから、績む、織る、染める、そして晒す、とあらゆる工程が、情感豊かに詠われている。それらは多くが詠み人知らず、つまり庶民の実生活から生まれたもので、その詠みぶりは率直かつモノに即しているから、当時の生活文化を知る資料としても、大変価値が高い。たとえばこの歌。

紫は　灰さすものぞ　海石榴市（つばいち）の
八十の衢（ちまた）に　会へる子や誰

（賑やかなつば市の八十の辻で出会ったあなた、名前を教えて）紫は紫草だけでは染まらず、媒染剤として椿の灰が必要なことから、「紫は灰さすものぞ」が、つばき、つまり海石榴市の序詞になっている。当時の染め方が巧まずして歌いこまれているのだ。

「さほどに染色方法が一般に知られていたのですね」と、中西先生に問うと、「あれは序詞というだけでなくもっと深い意味合いがありますよ」とのこと。紫は灰をさしてこそ美しく発色する、つまり紫を娘に、灰を自分に喩えて、私と交わってこそ娘さん、あなたはもっと綺麗になりますよ、と迫っているのだという。中西先生の解説を通すと、にわかに万葉びとが躍動して、いきいきと立ち現れてくるのである。

五年にわたり、日本の伝統織物を訪ねて思ったことは、手仕事に携わる職人さんは、万葉びとと同じく、自然への畏れ、祈りを持っていることだ。だから常に謙虚である。どれほど高い技術があっても最後は自然の力に委ねなければならないことを知っているからだ。確かに科学技術の進歩は、豊かな生活をもたらした。しかし、科学技術と職人の手仕事、この両極の二つは最先端で結びついている。宇宙ロケットの先端部分は、飛鳥奈良時代の金剛仏を作るのと同じ、鋳物の蝋型鋳造だという。新幹線の先頭は鍛金で叩き出し、超高層ビルのてっぺんはいわゆる鳶職人によるものだ。職人の心意気とカンの手仕事が、私たちの暮らしの土台にあること、また万葉集は私たちの暮らしの原点として、今に繋がっていることを、改めて気づかされる日々である。

エッセー

この欠落感

船木　拓生
（会　員）

この欠落感はなんだろう。すでに齢七〇を過ぎた僕だから、親しい人の死に幾度か会ってきた。が、このような感覚になるのははじめてだ。

幼友達が死んだ。十歳になるころ知り合い、頭が薄くなった現在まで何年かおきに顔を合わせただけだから親友には遠い。だからか、彼が僕のいる現世から突然のように去ってしまったことが「信じられない」という感覚ではない。彼と酒を飲みながら話し合いたいと、僕は意識して望んでいた。その機会が失われたことが、現実とか事実とかを越して、一つの現象として切実感をもたらしている。

昨年十一月半ばに会うつもりでいた。その僕からの一方的予定は、彼、次一が通院日とのことでならなかった。免疫力が落ちているので、人に会うことや外出は避けているとのことだった。すでに春ごろから病気と聞いていたから、とくに驚きもしなかった。ただこれらは人づて、当人の声で直に聞いたのではなかった。それから三ヶ月たたないうちの長逝だった。

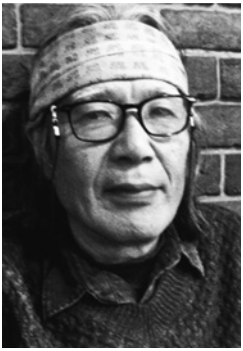
次一は僕の家から五軒先に引っ越してきた転校生だった。クラスが違ったから転校が何年生時だったのか、僕にははっきりしない。下校したハナタレどもは空地や道路を遊び場にして日

暮れまで過ごしていたが、その仲間に次一のいた記憶がない。ガキ集団へ新人が「入る」には抵抗感があったのかもしれない。社宅が多い衛星都市（廃語？）だったから、すでに塾通いをしていたのかもしれない。

親しかったのは中学生になった、しばらくの間だ。いっしょに登下校して、帰宅すると二人だけでボール遊びをしたが、二人とも身体の成長がオクテだった。あれは春休みだったのだろうか、二人だけで次一の祖父母のいる田舎に行き、何日か泊った。そこは昔、繁華だった街道沿いの町だ。立派な床の間のある広い部屋で寝たのだが、屋敷の外塀沿いに流れる疎水の音が夜の静寂を際立たせて、集落を囲んだ森と山の奥深さを教えてくれた。二人は布団に寝そべって文庫本を読んでいた。（武者小路実篤と石坂洋次郎だったような気がする）。次一が後年からはとても想像できないのだが、美少年だと気付いたのはもう少し経ってからだ。

中学校へ自転車で向かったことがあり、いつか競争となり、横を走るバスと接触しそうになり避けようとして自転車同士接触、歩道側へ二台いっしょに激しく倒れたことがあった。当然、ケガをしたはずだが、だれにも告げなかった。元気に健気だった。

高校もいっしょだ。覚えているのは帰り道、待ち合わせたのだろうが、ついに口をきかなかったことがあった。ケンカではない。会話が始まって間もなく、互いにしゃべることができなくなった。相手のことばから、その奥にひそむとする「内面」をあばく心理戦になってしまった。これは陰湿とは違うが、付合い方として楽しくはない。お互い「自我に悶える時期」を通



船木　拓生（ふなき・たくお）

三河国は岡崎の県営追進農場内で一九四七年に生。〈山本安英の会〉において木下順二作品の舞台化等に二十年余、従事。著書、『富士の気分』（西田書店）、『評伝　観世栄夫』（平凡社）他。

っていたのだろうが、当人たちにはちょっと厳しい「通過儀礼」だったはずだ。

高校三年生になってはじめて同じクラスになった。級友だが、このころには付き合う友人が異なりライヴァル意識からも遠く、仲違いすることもなく、ただ疎遠だった。そして大学が西と東に別れ、そのまま半世紀という月日が流れた。この期間も、母同士が親しかったから大よその動静は聞いていた。こちらのこともどれだけか伝わっていたはずだ。

だから、二人だけで会って話したのは十代のみ。壮年期に声をかけなかったのは心身の繁忙による余裕の無さとともに、一種のテレのような面映ゆさがあったように思い出す。その次一が社長になったと聞いたときはびっくりした。目立つことのない、そういう性向とは縁のない、素直なおとなしい存在だったから。「モーレツ社員」になったとしても、出世競争を勝ち抜いて、さらにリーダーになるとは、あの優しい次一のどこにそんな指向性がひそみ、それを露出、生育させるどんなきっかけがあったのか。そこに「無理」がなかったわけがないと、その無理を敢えて実践した、その自分に向けた努力、膂力をスゴイと感嘆しながら、思う。

次一と話したかった中身は、この僕の「思い込み」「独り合点」なのかもしれない。相手にすれば厄介な、メンドーで煩わしい、どうでもいい、忘失の彼方に押しやった、さらには実際にはなかったかもしれない過去の確認なのだ。恥ずかしい種々が露出してくるのを喜び迎えるかのような自分にこだわる僕を、次一の健康健全が避け疎んじたのかもしれない。今は、それも確認不能となった。

僕を形成している或る部分が塊となって墜落、そこが透明空白な孔となってしまった。墜落部分が増え、やがて空白もありやなしやの透明相を季節の風の通り抜けてゆくのが見え、聞こえそうだ。

エッセー

宮澤賢治の恋と朗誦伴奏

澤口　たまみ
（会　員）

岩手で野山を歩きながら、自然にまつわる文章を書いていたわたしが、光栄にもエッセイスト・クラブ賞をいただき、仕事として原稿依頼をもらえるようになったのは、もう三十年前のことになる。名刺にはじめて「エッセイスト」と刷ったときの、誇らしさと嬉しさと、身が引き締まる思いは忘れられない。

ところが、そのあと何よりも驚いたのは、「書く」のではなく「話す」仕事が次々と舞いこんだことだった。講演である。話すのが何より苦手だったわたしは、（何十人、何百人の前でとうとうと話せるくらいなら、書くことを仕事になんかしていない）と、恨めしく思ったものだ。講演嫌いは、一時は神経性の胃炎を起こすほどエスカレートしたが、石の上にも三年とはよく言ったもので、しだいに慣れてきて、いまではじぶんでも呆れるほど、よくしゃべるオバサンになった。

それどころかここ二年ほどは、宮澤賢治作品の朗読にとり組んでいて、人前で紹介される折に、「宮澤賢治の読み手」などと称されることさえある。おまけにこの春は、ＣＤを制作しようと企ててもいる。しかしそれも、わたしがエッセイストであることに端を発している。

いまではかがく絵本のテキストを書くことの多いわたしだが、エッセイストとして文章を書くときには、主に宮澤賢治をテーマにしている。賢治は、岩手の自然を見つめながら文章を書いた。わたしにとっては先輩だからだ。自然や宇宙という壮大な世界に立脚しているせいか、賢治の言葉は百年後のいまなお色あせることなく、わたしたちに重要な示唆を与えてくれる。

そんな賢治の言葉を読み解くうちに、女性とは縁がなかったとされる賢治が、相思相愛の恋をしていたことに、わたしは気づいた。しかも調べてゆくと、その恋はほんとうだと、恋人のご遺族からの証言が得られた。そうして二〇一八年、夕書房から『新版　宮澤賢治　愛のうた』を出版させてもらった。

夕書房は、高松夕佳さんという女性によるいわゆる「ひとり出版社」である。それだけでもたいへんなのに、宮澤賢治の恋という、これまで語られてこなかった事実について、本にするのはそうとうな覚悟がいる。わたしはこの本を出すに当たって、著者自らが営業担当になって、宣伝に努めなければならないと決心した。

宮澤賢治の世界は、学会があって詳細な研究がなされており、たくさんの研究者さんが存在している。わたしは研究者としてではなく、あくまでもエッセイストとして、広くたくさんの読者に、宮澤賢治を知ってもらうことを目的としている。したがって、文章はできるだけ平易

澤口たまみ（さわぐち・たまみ）

絵本作家・エッセイスト。１９９０年『虫のつぶやき聞こえたよ』（白水社）で第38回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。以後、自然や昆虫、いのちをテーマに絵本のテキストを書く。絵本に『わたしのあかちゃん』、『だんごむしのおうち』、２０１７年『わたしのこねこ』で産経児童出版文化賞美術賞（以上、福音館書店）。また宮澤賢治の言葉を読み解くことを続けており、『それぞれの賢治』（世界文化社）、『新版　宮澤賢治　愛のうた』（夕書房）などがある。

に、分かっていることのすべてを網羅的に書くのではなく、読者の興味を引く内容を優先した。

それでも、研究者諸氏のジャッジは鋭く、わたしの書いた内容とは異なる歴史的事実が判明したりした。わたしはその都度、ブログなどで異なる事実が判明したことや、それに関する自身の見解を明らかにしながら、二刷において改訂すべく、初版を売ることに努めてきた。

その方法は、宮澤賢治のイベントを開いて本を紹介し、販売することだった。幸いにもミュージシャンの応援を得られ、わたしが賢治の恋にまつわる作品を朗読するときに、即興で伴奏を添えてもらえることになった。

そうするなかで出会ったのが「朗誦伴奏」という言葉だった。賢治と音楽についての研究を続けてこられた佐藤泰平さんが、二〇一八年、花巻市から贈られる宮澤賢治賞を受けられたとき、「宮澤賢治と朗誦伴奏」というタイトルで記念講演をなさったのである。

その内容は佐藤さんのご著書『宮澤賢治の音楽』（筑摩書房）にも詳しいが、賢治は音楽家の大津三郎からセロのレッスンを受けたあと、どうしてセロを習いたいのかと尋ねられ、「エスペラントの詩を書きたいので、朗誦伴奏にと思ってオルガンを自習しましたが、どうもオルガンよりセロのほうがよいように思いますので……」と話したという。また、賢治は自分の詩を朗読するとき、親友の藤原嘉藤治に即興でピアノを弾かせている。佐藤さんはその講演で、賢治の言う「朗誦伴奏」とは「朗読者の声、作品の内容に合わせ、最もふさわしいメロディーを、最も少ない音数で、即興で演奏すること」だと言い、そんな賢治の考えは、すでに音楽家として活躍していた大津三郎にも理解しにくかったであろう、とのことだった。

エスペラントと日本語の差こそあれ、宮澤賢治作品の朗読に即興で伴奏を添えていたわたしたちのイベントは、偶然にも「朗誦伴奏」を実践していたことになる。賢治がどのような朗読を希望していたのか、その願いの一端を知りたくて、わたしはいま、賢治作品の朗読という沼にはまっているのである。

エッセー

窪田空穂の短歌 ―枯れざる生命（いのち）―

臼井　和恵
（会　員）

歌人・国文学者の窪田空穂（一八七七～一九六七）に関する著作、『最終の息する時まで　窪田空穂、食育と老い方モデル』（河出書房新社）を、この三月に刊行したばかりである。窪田空穂に惹かれてから、早二十年余。そもそもの出会いは、大正期に空穂が担当した読売新聞の「身の上相談」であった。家族関係学専攻のわたしは、身の上相談を素材にしてその時代の家族問題や女性問題に迫ろうとしており、日本エッセイスト・クラブへの入会も、読売新聞の「人生案内」を担当された金森トシエ婦人部長のお声がけの賜物であった。お洒落で素敵な金森記者の頃から励ましていただいた。

窪田空穂の身の上相談は、大正五年十月十二日に回答が始まり、大正六年五月二十三日を以て終了する。空穂が大正六年五月二十六日に辞表を提出したからである。身の上相談に「貞操」問題を取り上げた空穂の対応およびその回答が当時の社主（本野一郎）夫人の本野久子（愛国婦人会会長も経験）の目に留まり、「読みにくし」と苦情が入ったことも一因であるとされる。大正六年五月十六日の空穂日記は、この間の事情を以下のように記している。（　）内の注は筆者。

「本野夫人から、身の上相談が貞操の事ばかり言ひ、読みにくしと、石黒（理事）に小言あり、石黒より前田君（当時婦人部長の前田晁　空穂の

親友）に注意が来てゐて、それを同君から私に廻した。不快に感じ、その止むを得ぬ事を書いて前田君に渡し、いけなければ御免を蒙ると書き添へておいた。」

社内各部の勢力争いもあったと思われる。前田婦人部長を初めとして空穂、中村白葉らも連袂辞職した。白葉が描くその時の空穂像は、すこぶる魅力がある。

社内で「身の上相談」には少し男女のことが多すぎるという批判が起こり、上層部からその点少し注意するようにという達しが部長まであった。友人同士である前田部長からそれが窪田さんに取りつがれると、窪田さんは笑って「なるほどね、男女問題が多すぎるか。しかしこの人生に男女問題以外に何があるかね？」と言っておられたが、そのうちにさっさと机の上を片づけて、「じゃあな前田、おれはこれでよすよ。あとはよろしく。」こう言って、すっと帰ってしまわれた。」（「窪田空穂の大きさ」『短歌』昭和四十二年七月号）

婦人部連袂辞職にも繋がった空穂の「貞操」に関わる身の上相談とその回答については、拙著『窪田空穂の身の上相談』（角川書店）に詳しい。

空穂は、死の四、五日前まで短歌を詠み続け、八十九年を老耄と無縁に生きた。空穂は二十歳で母を、二十二歳で父を亡くし、三十九歳で大切な妻をお産で失う。残された二人の子と空穂のその後には、幾多の困難が待ち受けていた。亡くなった妻の妹との再婚と離婚、さらなる再

臼井　和恵（うすい・かずえ）

一九四九年、群馬県生まれ。お茶の水女子大学家政学部家庭経営学科卒業・同大学院家政学研究科修士課程修了。相模女子大学教授、副学長を経て、相模女子大学名誉教授。現在、東京福祉大学教授。専攻は家族関係学。著書に『窪田空穂の身の上相談』（角川書店）、『明治の恋―窪田空穂、亀井藤野の往復書簡』（河出書房新社）、『最終の息する時まで　窪田空穂、食育と老い方モデル』（河出書房新社）ほか多数。

婚と二男の戦病死を経て空穂は生き抜いていく。

最終の息する時まで生きむかな生きたしと人は思ふべきなり　『清明の節』

と晩年の空穂は詠う。空穂の臨終に立ち会った長男の窪田章一郎は、空穂の死を次のように詠んだ。

あはれまれ生きじと言はしきどつしりとさびしげもなく死にたまひたり　『硝子戸の外』

この二首からも、こころに響く老い方のモデルが顕ち上がってくるような気がする。枯れざる生命と思われる窪田空穂の短歌を記したい。その調べを声に出してお読みいただけたら幸いである。

雪割草ほのかに白く咲きて散り青き苞解く春蘭の花　『丘陵地』

生活は一に信なり信あらば道おのづから開けゆくべし　『青朽葉』

われや母のまな子なりしと思ふにぞ倦みし生命も甦り来る　『まひる野』

其子等に捕へられむと母が魂螢となりて夜を来たるらし　『土を眺めて』

死にし子が形見となりし冬襦袢われこそ著めと今朝を身につく　『冬木原』

わがためは第一の物われはわが命に仕へかくも老いにし　『老槻の下』

今にして知りて悲しむ父母がわれにしましその片おもひ　『冬木原』

老いふたり互に空気となり合ひて有るには忘れ無きを思はず　『去年の雪』

全力を籠めて耐へ来し一瞬と一瞬のつづきしばしばして来し　『青朽葉』

新年の市に良書充ち読むを待つ読みてふやさむ生涯の富

桜花ひとときに散るありさまを見てゐるごときおもひといはむ　『清明の節』

空穂は昭和四十二年四月十二日の夜八時に、住み慣れた雑司ヶ谷の自宅で亡くなった。満八十九歳十ヶ月であった。絶詠の一首を。亡くなるわずか五日前の詠である。

四月七日午後の日広くまぶしかりゆれゆく如くゆれ来る如し　『清明の節』

結びにわたしの一番好きな空穂のお歌を。

目つむればあらはれきたる面影や余るあはれにいや目をつむる　『冬日ざし』

エッセー

難病「ＡＬＳ」を告知されて

井口　隆史
（会　員）

なんぎな病気にかかった。

いま世界で騒がれている新型コロナウイルスによる肺炎ではない。私のほうは神経系統の難病で、十九世紀に発見されながらいまだに原因が突き止められていない。したがって治療法がない。予後にまったく希望がないので、ひと昔前まで本人には病名が告知されることもなかったという。

「筋萎縮性側索硬化症」である。英語の略称でＡＬＳ。私が告知されたのは、昨年の十一月だ。検査のために入院していた大学病院で、脳神経内科の先生に告げられた。

脳から手足まで伸びている運動神経細胞が変性していて、筋肉に脳の指令が伝わらない。このため、筋肉が萎縮し、口や喉、四肢の筋力が低下していく。進行は個人差が大きいものの、発症して平均二～三年で呼吸筋が麻痺し、三～五年で死亡するといわれる。

私が検査を受けるきっかけとなったのは、構音障害（呂律が回らないこと）と歩行困難がひどくなったからであるが、振り返れば、発症は四年前になるかもしれない。

しゃべるとき、カ行や夕行の発音がおかしいと自覚し始めたのと、右足を引きずるようにな

ったのが四年前の春先だった。呂律不良は入れ歯の噛み合わせのせいだと思っていたら、歯科医から「知らぬうちに軽い脳梗塞を起こしているのでは？」と言われる。脳神経内科を受診したが、異常は見つからなかった。そのときの医師に、「加齢のせいですな。家にひきこもらず、外での会話をこころがけてください」と言われて終わった。

そのうち、呂律も歩行も怪しさを増していき、外出には危険が伴いだした。

杖をつきはじめた二年前のことだ。電車で席を譲られた。座った位置が手すりから離れている。下車駅に到着し、立とうとするが腰が持ち上がらない。杖を梃子にエイヤッと尻を浮かせたとたん、足がよろけ、杖が飛んだ。気がついたら、斜め前に座る婦人の膝元に頭から滑り込んでいた。この日を境に、付き添いのない外出はしなくなっている。

エスカレーターも怖くなっていた。頃合いを測って、動く手すりに、「今だ」と掌を掛ける。だが、足のほうが動かない。

身体が痩せてきた。食欲は十分にあるのだが、うまく飲み込めず、誤嚥で咳き込むことが多くなった。しきりによだれを垂らす。茶碗を持つ手がこむら返りを起こす。

すべてが、歳のせいだ、「老衰」の道を辿っているのだ、と考えていた。「原因は歳じゃないでしょう、その呂律は」と複数の医師から言われた。それで昨秋、脳神経内科を再び訪れ、もろ

井口　隆史（いぐち・たかし）

1934年大分県に生まれ、和歌山県で育つ。ノンフィクション作家。本名・井口民樹。早稲田大学第一文学部英文科卒。産業経済新聞東京本社からフリーに。『安部磯雄の生涯』（早稲田大学出版部）で第60回日本エッセイスト・クラブ賞受賞。本名による著書には、『愚徹のひと丸山千里』（文藝春秋）、『今こそ丸山ワクチンを！』（丸山茂雄共著・KKベストセラーズ）、『三冠騎手吉永正人』（朝日出版社）など多数。

もろの検査を受けたのだった。

確定診断がついてから、四ヵ月になる。いまは車椅子生活だ。進行を抑制する薬を服用しているが、効いているかどうか、自分ではわからない。しかし、一日一日がとても貴重に思えるようになった自分がいる。きのう出来ていた動きが、きょう出来ない。さっきメールを打った指が、あすは動かなくなるかもしれない。もっぱら妻の手を借りていながらも、生きている実感が、日々、身体に沁みる。

悩ましい問題がある。担当の医師から、胃瘻の造設を促されているのだ。腹に穴をあけて栄養補給路をつくる手術である。私の嚥下障害が、早かれ遅かれ、摂食障害を招くと予測しているのだろう。

私はこれまで、胃瘻とは寝たきりの病人のものだと思っていた。自分はいつ寿命を終えても悔いはないが、寝たきりでの延命は望んでいない。それに、まだまだ舌は大丈夫、うまいものを口で味わいたい……。回答を持ち越している私に、医師が「呼吸筋が弱ってからでは、手術ができなくなります」と言い、「胃瘻を付けたあと、口でも食べられるのです」と説明を加える。みぞおちに取り付けたボタンを開閉することで、入浴も外出も可能なのだそうだ。

ならば、いいか……と〝食指〟が動く。やはり本音では、まだ生きる気満々であるからだろう。ただ、一日三度の栄養補給と、器具の準備、清浄などを考えると、サポートしてくれる人が必要である。私の家族は七十代の妻だけ。その彼女も、近頃めっきり疲れが見える。在宅看護師や介護ヘルパーの絶対数が足りないという報道も気にかかる。

実のところ、仕事にも未練があって、それは新しい筆名でエッセイスト・クラブ賞を受賞した後、その名での著作を残していないということである。この残念を埋めることはもはやできまいが、今すこし、命を養うことは続けていいだろう。せめて、コロナ騒ぎの終息ぐらいは見届けようか。

「胃瘻」の手術を受け容れよう、と私は思い始めている。いずれ、人工呼吸器を装着するか否かを問われる日も来る。その答えは、まだ出していない。

エッセー

それが何か！で済まない　ここは日本！日本人！

村尾　清一（会　員）

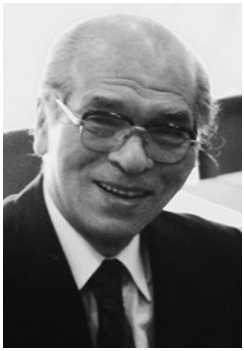
試験委員「君の女性観は？」
受験者村尾「妻をめとらば才たけて、眉目うるわしく情けある…です」
委員「鉄幹だな。そんな女性に惚れたり、惚れられたりしたことがあるかね？」
村尾「（下世話だなと思いながら）ハイ、惚れたことはありますが、惚れられたことは、ありません」
試験委員の問に笑声。
一九四八（昭和23）年三月、東京銀座の読売新聞で行われた入社試験の一齣である。この風景は、当時人気のあったＮＨＫの「社会探訪」四十分間の一風景で、全国放送された。
半月後、戦後最初の読売新聞の入社試験に合格した若者十名が、顔を合わせた。村尾にとっては十名の同期生である。
私に下世話な質問をした委員は、コラムニスト高木健夫氏であると知った。それから、事多い戦後の歳月が流れた。
Ｔ君は、芥川賞をとって小説家になった。
Ｏ君は、名門の御曹司で弟の妻はプリンセスだったが、妙に細かいところがあり、「軍曹」と陰で呼ばれた。
Ｍ君は、レッドパージに会って、社会党機関

紙の編集長になった。

S君は、俳優にも稀な美男子で、英会話の達人だったが女性関係で姿を消した。

と、ひとり一人のその後の生き方を思い出すが、十名のうち七名は旧制帝国大学の卒業生、ワセダが二名、慶応が一名だった。受験生は千数百名で、その中から合格した若者であった。

村尾　清一（むらお・きよかず）



日本エッセイスト・クラブ名誉会長。瀬戸内海生まれ。高松中、三高、東大法卒。戦後読売新聞入社、社会部、中東、インド特派員。昭和29年第五福竜丸事件で、「死の灰」の言葉を作った。論説委員、一面コラム「よみうり寸評」約20年担当、取締役、日本記者クラブ賞。著書「ついに太陽をとらえた」（共）「写真でみる昭和史」「エッセーの書き方」「日本人の手紙」等。

自慢話を許して戴きたいが、私はすでに朝日新聞の入社試験に合格していた。朝日は受験生二千名の中から十名採用した。私の勤務先が九州小倉が気に入らなかった（小倉の方々ごめんなさい）から、それに東京にいたいために「朝日を蹴った」のである。

朝日には北海道へ行った一柳君など後の社長がいたが、読売だって色々な人物がいた。

I君のことを話そう。同期のI君は、政治部記者になったが、フトしたミスで、昇進の道を外れた。心機一転、政治家を志し、衆院選に打って出た。私はI君のために「東北のケネディ」というキャッチフレーズを作った。当時、J・F・ケネディが、若さと健康で人気を集めていた。それにあやかったか、I君は一発で当選した。

ところが次の選挙で彼は落選した。私が「どうした？」と尋ねると彼は白状した。「川端康成の雪国の主人公になった気分で選挙中、温泉で若い芸者と戯れていた」

心を入れ替えたI君は、派閥のボスが馬好きなのを知って、毎朝四時に起きて近郊の厩舎に

行って馬の世話をした。そのせいか、I君は、防衛庁長官に抜擢された。

事件がやがて起った。日本人は不文律となっている天皇陛下と握手したのである。それはフランス大統領ミッテラン氏が軍関係の大臣とともに皇居を訪れたときに起った。昭和天皇は日仏首相、大臣が居並ぶ中でI君の前に歩みより右手を差し出した。I君もあわてて右手を出し握手した。

侍従たちの間にざわめきが起った。日本の大臣が皇室の不文律を犯したのである。

事件はI君の背丈や顔面の造作が、ミッテラン大統領とそっくりであったことが原因だった。

ミッテランからI君にも謝罪が来、それがきっかけで二人は親交を深め、後年、フランスの最高勲章レジオンドヌールの「グランクロワ」(大十字章)がI君に贈られた。日本では故吉田茂首相だけが持っている。私が手に取って見ると金属を打ち出しただけで大勲位菊花章の芸術性はない。

ミッテラン氏は、パリの記者会見で「貴下は愛人に生ませた娘とカルティエ・ラタンで食事したというが事実か」と若い記者に聞かれて、平然と「エ・アロール」(Et alors!=それが何か)と答えた。フランスでは政治家の下半身の噂は問題にしないことになっている。

「議長によくなれたね」というとI君は答えた。「陛下から詔書を戴いて正面を向いたまま階段を三段下がらないといけないが、ライバルはそれができなかった」

「議長はいいかね」というとI君は「高い処にいるから議事が長びいたとき困る」という。生理的欲求が激しく起きても、席をはずすわけにはいかない。そのため議会が始まる前日には、「茶断ち」をしているという。

外国には現在の「はくパンツ」みたいなものができていると私は聞いたので、そういうものをこしらえて、はいたらどうかというとI君は答えた。「そうしたら君ら新聞記者は〝議長は、赤ちゃんのおしめをしている〟と書くだろう」と言った。

「エ・アロール」では済まない。ここは、日本・日本人だった。

エッセー

上様（うえさま）とコロナウイルスに見る日本のマスコミ

大髙　英昭
（会　員）

デパートで買い物。領収書を貰う。店員曰く「最近税務署からお達しがあり、宛先に上様（うえさま）と書くのはヨロシクない。但し書きのお品代も駄目です」と。つまり税務申告の際に不明瞭な領収書は、認めませんということらしい。

一方の衆議院予算委員会。首相主催の桜を見る会前日に安倍首相後援会ご一行様８００人が立食パーティでもてなされた。ひとり５０００円というが、個人がそれぞれに支払っているので領収書はないと主張。総理の口から上様とかで出しているかもしれないが、個人払いなので知らないという。庶民には上様は認められず、政治の世界では上様でよいらしい。

今どきホテルのパーティで５０００円はないし、ホテル側も見積り書を出し、後援会側に領収書を出したとの回答。（後に、ホテル側は前言を撤回し、否定。これも忖度）

モリ、カケから始まって、あるべき文書が破棄されたり、墨で塗りつぶされていたりでウヤムヤになってしまう。

延々と続く野党側の追及。そのうちにコロナウイルス騒ぎである。くだらない審議をやって

いないで、国を挙げて取り組む政策をやることがあるのではないか。そんな声が出始めた。持久戦にもちこめば逃げ切れる前例がまたひとつ。税金で賄われている桜を見る会に後援会や地方議員が大勢招かれ、招かれた別の人はアベシンゾウの招待状を載せたチラシで年寄りを信用させ、金を巻き上げる。

ＮＨＫの人気番組「チコちゃんに叱られる」ではないが、今こそ日本のマスコミに問いたい。「行政の文書管理規則は正しく守りましょう。政治家は真実を語りましょう。それを監視するのが、あなたたちマスコミの使命ですョ」と。

コロナウイルス問題でのマスコミの追及も表面的だ。一生懸命取り組んでいる日本の政府の対応を批判するが、責められるべきは中国とＷＨＯではないか。ＷＨＯのテドロス事務局長。多額の援助を中国から貰っているエチオピア出身らしく、盛んに中国擁護に回る。中国と他国との交流を妨げてはならないと当初からコメントしていた。ＷＨＯの対応については事件発生に遡って、検証されなければならない。

米国のカーニバル・コーポレーションの傘下にあるダイヤモンドプリンセス号。親会社（英のＰ＆Ｏ）もカーニバル社も、その対応について国民の前に出てきて説明をしていない。飛行機なら機長が、船であれば船長が絶対的な権限を持つのに―である。国（日本）が船会社に求める補償はどうなっているのだろう。

ボクがアメリカに駐在していたとき、アメリカの政府や産業界の日本に対しての発言。日本

大髙　英昭（おおたか・ひであき）

昭和16年生まれ、千葉県出身。東京大学法学部卒。トヨタ自動車取締役、株式会社デルフィス社長、北米トヨタ自動車社長、米国企業の役員などを歴任。現在、株式会社パソナグループ副会長。著書に「ソクラテス半世紀の軌跡」、「国際マーケティング」などがある。

は、いわば言われっぱなしで、記者会見でも日本のマスコミは沈黙をし、質問をしない。グローバルにコトがすすんでゆく現代。マスコミの役割りはもっと世界に目を向け、掘り下げてゆくことだと思う。

エッセー

びっこ

ドリアン　助川
（会　員）

右足の裏が突然痛むようになった。どこかで妙なひねり方でもしたのだろうか。はじめはのんびりと構えていた。

ところが、数日たっても痛みがひかない。実は昨年から大学で教鞭をとるようになり、思い切ってキャンパスのそばに引っ越した。ここが坂の多い街で、大学に通うのも買い物に行くのも、毎日喘ぎながらの上り下りである。これが原因だろうか。

などと考えているうちにひどく痛くなってきた。センター試験や入試の監督で立ちっぱなしだったのもよくなかったのだろう。足を引きずらなければ歩けなくなり、とうとう病院のお世話になった。

骨には異常がありません。足に合わない靴のせいで筋肉を痛めたのでしょう、というのが医者の見立てだ。

たしかに靴を買い替えた。大学から給料をも

らえるようになったので、すこし高価な靴にした。それが裏目に出たようだ。その靴と私の足との相性がわるく、しかも上ったり下ったりだったから、足裏をいじめ続けたらしい。私はリハビリに通うようになり、看護師さんから「むちゃくちゃ痛いですよ」とあらかじめ言われる注射を打たれることになった。これは本当に顔が歪むほど痛い痛い、痛み止めの注射であった。

さて、私が訴えたいことはここから先である。ここまでは前振り。

自分のブログで、私はこの顛末を書いた。今、びっこをひいて歩いていますと。

すると、すぐに反応があった。痛みに対する同情ではない。私の言葉に対するお怒りというか、お叱りというか、つまりそういうものである。

「びっこは差別語ではないですか。言葉を扱う者としてそれでいいのですか」

いきなりこう来られて、しばしの間私は呼吸のみの人間となった。

「びっこ」が好ましくない言葉であることくらいはもちろんわかっている。本の原稿や新聞記事を書いているなら私も注意を払うだろう。しかし、自身の足の具合を自分のブログで綴ってもこういう反応が来る時代になってしまったのだ。なんだか狭いドラム缶に胴が挟まってしまったような気分だった。

ドリアン助川（ドリアン・すけがわ）

作家、歌手、明治学院大学国際学部教授。１９６２年東京生まれ。早稲田大学第一文学部東洋哲学科卒。放送作家を経て、１９９０年バンド「叫ぶ詩人の会」を結成。ラジオ深夜放送のパーソナリティとしても活躍。著書多数。小説『あん』は現在14言語に翻訳されている。２０１７年、同作がフランスの「ＤＯＭＩＴＹＳ文学賞」と「読者による文庫本大賞」の二冠を得る。また２０１９年、『線量計と奥の細道』が第67回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。近著に『新宿の猫』『水辺のブッダ』など。

差別語に関しては、これまで神経質にならざるを得ない作品を幾つか書いてきた。ハンセン病回復者の生涯を描いた『あん』という小説がその筆頭で、病気によって指を失ったり、顔の形が変わってしまった人々をどんな言葉を使って描くのか、これは悩んだ。また患者のみなさんを社会が差別したとき、どんな言葉が使われたのか、これは恣意的に書くことにした。編集者は頭を抱えていた。

別の作品では「色弱」が問題となった。私はその色弱のせいで、就職活動にあたりほとんどの志望企業から「受験不可」と突き返された経験がある。そのときの絶望感と淡い恋愛を核に『新宿の猫』という小説を書いた。色弱はこの物語のキーワードである。すると校正者から、「色弱は差別語です。色覚障害と直して下さい」とチェックが入った。

いや、あの、びっくりしましたよ。今教育現場では、たしかに色弱という言葉はあまり使わなくなった。「色覚の多様性」に置き換えられることが多いらしく、就職試験での差別も昔ほどはひどくないようだ。そこに来て「色覚障害」と直せとは。

つまり、差別語の輪郭は極めて曖昧なのではないか。放送局や新聞社、出版社のみなさんは一応、差別語に関するハンドブックのようなものをお持ちだ。しかしこれはあくまでも自主規制の末にできたものであって、最初から差別語という枠組みが存在しているわけではない。

いずれにしても、どこかでだれかが常に見張っているような、ある種の窮屈さは否めない時代になった。問題はここから先の態度である。

いつぞやの筒井康隆さんのように筆を折るという手はある。「差別語狩りをするなら俺はもう書かねえぞ」と宣言するのだ。だが、それは筒井さんのように筆を折ることが大事件になる人だけに許される行為である。私が筆を折ったところで特になにがどうなるというわけでもない。それでは意味がない。

次に、差別語だと指摘された言葉はすべて校正者の言う通りに直して書いていくという生き方。「猫はみんな色弱なのよ。色彩よりも輝きを知ろうとしたあなたの目と同じなの」という恋人のロマンチックなささやきも、「猫はみんな色

覚障害なのよ」に変えてしまうのだ。いや、やめよう。そりゃ無理だ。

ではどうすればいいのか。今のところの結論はこうだ。差別語だと指摘された言葉は、言葉を扱う者のプライドでどんどん新しい表現にしていけばいい。「びっこ」がけしからんというなら、直してみせましょう。

このところ私は足がたいへんに痛く、まともに立っていることができない。試験監督中も片足をそっとあげているので、フラミンゴにでもなった気分だ。そして戸外では、片方の靴に金貨を隠した泥棒のような歩き方になる。金貨は重い。どうしてもそちらの足だけ引きずってしまう。

あ、泥棒というのもいつか差別語として指摘されそうな気がしてきた。窃盗犯に直しなさいと言われるな。

《会報編集委員会から》

◇本会報でご覧のエッセーは本来、4月に皆さまのお手元に届く「春号」に載せるはずでした。しかし、コロナ禍を受けて、編集作業が二カ月ほど中断を余儀なくされ、季節をずらして「夏号」に模様替えした次第です。ご寛容を。

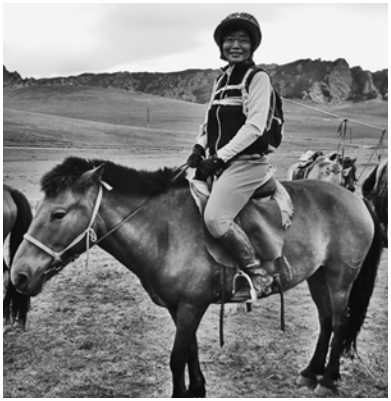
◇総会の決議で、役員3人の新任が決まりました(後述)。本会報にエッセーを寄せている堀尾真紀子さんは新理事に、大髙英昭さんは新監事に。やはり理事に新任の秋山秀一さんは昨年冬号で例会報告を載せています。お三方の、いわばお披露目。

◇いわゆる差別語について。ドリアン助川さんのエッセーは差別語一般の論考ではなく、特定の言葉について、ブログで使ったときの体験を主に綴っています。議論はありそうですが、限られた会員向けの会報です。事務局が発する文章では、一般的に各新聞、出版社の対応を参考にすることになります。当クラブが会員の表現の自由を最大限尊重する立場にあることは言うまでもありません。

例　会
2019.12.16

漢詩の楽しみ
―庾信の数奇な生涯―

ゲスト　漢詩人
市川　桃子　氏（会員）



漢詩は難しそう、漢字ばかりでつまらなそう、という偏見を打ち破って、漢詩はなかなか面白いのだ、ということを伝えたくて、例会でお話をしました。

取り上げたのは、庾信（五一三～五八一）という、中国南北朝時代の文人です。

この時代、南朝では、漢民族が華麗な貴族文化を繰り広げていました。それに対して、北朝には、勇壮な騎馬民族が覇権を争っていました。

南朝の大貴族の一門に生まれた庾信は、父と共に、政治の方面でも文化の方面でも南朝の梁の国を支えていました。その華麗な詩文は、韻律に気を配り、耳で聞いて綺麗で、巧みな対句を置き、目で見ても華やかでした。漢詩の成熟に大きな功績を残したといわれています。

次は若い時代の庾信の詩句です。

月入歌扇　　月は歌扇に入り
花承節鼓　　花は節鼓を承く

（訳：月は歌姫の扇を照らし、花もまた太鼓のリズムに乗っている。）

ところが、北朝の軍隊が刻々と南朝に迫ってきました。庾信は四十二歳のとき、追いつめられたような心境で、和議の使者として北朝の西魏に向かいました。しかし西魏の首都洛陽に着いた時、南朝では祖国の梁が滅び、庾信は帰る所が無くなって西魏に囚われの身となりました。

北朝の西魏は蒙古族の出身と言われ、文字を知らない者たちも多く、国家体制を整えるために、捕虜となった南朝の教養のある人材を優遇していました。庾信も、西魏の朝廷に官僚として出仕することを求められました。

しかし、庾信は、西魏に仕える気持にはなれません。なぜなら第一に、南朝の高い教養をもって育った庾信は、荒々しい北方の文化になじめませんでした。また、梁の国の恩寵を

受け、梁を慕う気持が強かったのです。さらに、儒教の教えから、祖国への忠節を第一義と考えていました。そして、歴史的に見れば、北朝は不安定で、西魏の朝廷を信頼することはできないのでした。

そのころの心境を、庾信は、漢詩によって縷々とのべています。

農談止穀稼　農談止だ穀稼
野膳唯藜藿　野膳唯だ藜藿
操楽楚琴悲　楽を操らんとする
　も楚琴悲しく
忘憂魯酒薄　憂いを忘れんとする
　も魯酒薄し

（訳・話すことといえば農事の、ただ穀物の収穫のこと。食べるものは鄙びた、あかざや豆の葉ばかり。音楽をかなでようとしても、故国の琴の音は悲しい音色になり、愁いを忘れようとしても、北国の魯の酒は薄くて酔えない。）

しかし、あしかけ三年の苦悩の後、次第に、庾信は自分の運命を受け入れるようになりました。腐敗し老朽した南朝の体制とは異なって、後の隋や唐といった帝国に連なる、たくましい北朝の体制にある歴史的潮流を理解し、それへの参与を知識人としての自己の責務と受け止め、前向きに新政権に協力するようになっていきました。

やがて、庾信の作品は、流麗で妖艶な南朝時代の作風から、次第に勇壮なものに変わっていったのです。

箭飛如疾雨　箭飛びて疾雨の如く
城崩似壞雲　城崩れて壞雲の似し

（訳・飛ぶ矢は驟雨のようで、崩れる城は砕ける雲のようだ。）

さて、もし漢詩がなかったら、後世に伝わる庾信の経歴は、彼の気持ちに関わらない、殺風景なものになったことでしょう。漢詩にその時々の喜びや悲しみを歌いこむことで、伝記からだけではうかがい知れない庾信の思いを私たちも追体験できます。

今回は庾信の数奇な生涯を追うことで、漢詩の様々な楽しみを知っていただこうと思いました。漢詩は、美しい瞬間、日記、議論、政治批判など、いろいろな内容をうたうことができます。文字の中に、さまざまな物語やニュアンスを込めることができます。音の美しさや訓読のリズムも楽しみです。漢詩は奥が深く、一文字もゆるがせにはできません。

そのような漢詩の楽しみを、今回少しでも伝えられたら幸いです。漢詩を作ってみませんか。

いちかわ・ももこ　東京大学文学部中国語中国文学学科卒業。明海大学名誉教授。文学博士。主に中国の古典詩、日本の漢詩を研究。著書に『李白の文―序・表の訳注考證』、『李白の文―書・頌の訳注考證』、『中国古典詩における植物描写の研究』、『幕末漢詩人杉浦誠『梅潭詩鈔』の研究』（以上　汲古書院）、編著に『中国文化事典』（丸善）など。

例　会
2020．2．25

「予防」より「ケア」へ
―これからの認知症対策

ゲスト　東京都民間カルチャー事業協議会顧問
山本　思外里　氏（会員）

高齢者にとって最大の恐怖は「認知症」である。彼らが認知症を恐れる第一の理由は、認知症が典型的な「長生き病」で、平均寿命が延びれば延びるほど患者が増えること（八〇歳、九〇歳まで生きれば、だれでも認知症になる可能性がある）、第二の理由は、認知症で一番多いのはアルツハイマー病だが、この病気の原因はいまだに解明されておらず、有効な治療薬も治療法もまだ見つかっていないこと、三つ目は、認知症になると、認知障害で、自立した生活ができなくなり、患者を介護する家族や周囲の人たちに多大な迷惑をかけてしまうことだ。こうした恐怖の連鎖を断ち切ろうと、各国が真剣に認知症対策に取り組み始めたのは二一世紀に入ってからである。

まず、アメリカから見てみよう。アメリカ国立衛生研究所は二〇一〇年に認知症対策会議を開き、認知症研究の科学者たちの意見を集約した。その結果、これまで主流だった「認知症を薬で治す」「患者を治療する」という方針を変更し、「病気の発症を未然に防ぎ、予防すること」に重点を移すことにした。期待していた認知症治療薬の臨床実験が失敗して開発の見通しが立たないため、「治療から予防」への転換を図ったのである。

一方イギリスの認知症対策は、一人の心理学者の研究から始まった。一九八〇年代末に、イギリスの心理学者トム・キッドウッドが、収容施設で長時間にわたって多数の認知症患者を観察した結果、「周囲の人の接し方次第で、患者の病状は良くもなり、悪くもなる」という事実を突き止めた。そして「認知症は社会的・心理的病気であり、患者本人の声に耳を傾け、一人の人間として尊重するケアを実施すれば、認知症の症状は改善される」という「パーソン・センタード・ケア理論」を提唱したのである。イギリス政府は、この理論を全面的に取り入れ、二〇〇九年から、国を挙げて「ケアの改善」と「介護者支援」に取り組んだ。

アメリカの「予防重視」、イギリス

の「ケア改善」と二つに分かれた認知症対策の大転換は、日本の医療関係者にも大きな影響を与えた。厚労省は二〇一二年、アメリカの「認知症予防対策」を全面的に取り入れた「認知症施策推進五ヵ年計画」を策定、施行したが、それからわずか三年後の二〇一五年には、「認知症施策推進総合計画」（新オレンジプラン）を策定し、従来の予防策に加えて、「患者に対するケアの改善」「介護者への支援」という新しい方策を盛り込んだ。

「アメリカ方式」に加え、「イギリス方式」を取り入れたのは、「予防」の効果が限定的で、認知症患者が増える一方だったため、「誰もが認知症になり得るという前提のもとに、患者のケアと介護者の支援にもっと力を入れるべきだ」という声が強まったからである。

認知症患者への「ケアの改善」を強く求めていたのは、認知症患者の治療と介護を専門とする医療関係者たちで、その中心となってリードしてきたのが、日本における認知症治療の第一人者・聖マリアンナ医大名誉教授長谷川和夫医師である。

長谷川医師は、「その人中心のケア」を重視する「センタード・ケア理論」の信奉者で、五十年間にわたり、数千人の認知症患者を治療してきた。二年前八十八歳の時、自分が認知症にかかったことが分かると、彼はあえてこれを公表し、「認知症になっても、心は生きている。周囲の人が、その人を『一人の人間』として尊重し、心のこもったケアをすれば病状は良くなり、『普通の人間』として生きていける」と強く訴えた。

長谷川医師の「証言」は、これまでナゾだった認知症患者の「心の内面」を初めて明らかにしたもので、「認知症は長生きの代償で、誰でもなる。これからは『その人中心』のケアを一般に広め、認知症になっても誰もが安心して暮らせる〝共生社会〟を一刻も早くつくってほしい」という彼の切実な〝呼びかけ〟は、人びとの心を打ち、「予防」より「ケア」への方向転換をさらに推し進める結果となった。

やまもと・しげり　一九二九年生まれ。東大文学部卒。読売新聞社に入社し、社会部長、婦人部長、東京読売サービス社長、読売・日本テレビ文化センター社長などを歴任。著書に『大人たちの学校』『老年学に学ぶ』『よりよく老いる技術』など。

2020年 第68回日本エッセイスト・クラブ賞

『裁判官も人である　良心と組織の狭間で』　講談社

ジャーナリスト　**岩瀬達哉**　著

1955年生まれ。著書に『年金大崩壊』『年金の悲劇』（ともに講談社ノンフィクション大賞受賞）、『われ万死に値す　ドキュメント竹下登』など。

『万葉学者、墓をしまい母を送る』　講談社

国文学者　**上野　誠**　著

1960年生まれ。奈良大学文学部教授。万葉挽歌の史的研究と万葉文化論。『魂の古代学―問いつづける折口信夫』など著書多数。

第68回日本エッセイスト・クラブ賞は6月23日、同賞審査委員会（原田國男委員長）の最終審査で右記の2作品の受賞が決定、発表されました。

同クラブ賞は1953年（昭和28）に創設され、過去67回で187人が受賞しています。今年の審査には、クラブ会員および出版社からの推薦に個人応募を加えた計113作品が寄せられました。しかし新型コロナウイルスの感染拡大を受け、審査の会合が思うように開催できなかったこともあって、受賞作決定は例年より大幅に遅れました。

クラブ賞贈呈式は9月に

クラブ賞贈呈式は9月7日、日本記者クラブ内で臨時総会と併催する形で行う予定です。

受賞の言葉や審査委員長の報告、審査委員の講評などは、9月発行の会報秋号をクラブ賞特集号として、詳細に掲載することになります。

最終候補は7作品

今回のクラブ賞審査で、最終候補として7作品が対象となりました。受賞2作を除く、候補5作は次の通り。（敬称略、順不同）

信友直子著『ぼけますから、よろしくお願いします。』（新潮社）、今福龍太著『宮澤賢治　デクノボーの叡智』（新潮社）、関啓子著『「関さんの森」の奇跡』（新評論）、神野紗希著『もう泣かない　電気毛布は　裏切らない』（日本経済新聞出版社）、服部英二著『転生する文明』（藤原書店）

定期総会　書面議決で「3密」回避

新会長に遠藤氏

新予算、役員人事など可決

当クラブの2020年度定期総会は、新型コロナの感染を防ぐ「3密」回避の観点から、原則として書面（郵送）による議決権行使の形式で行われました。6月25日、当クラブ室で採決の結果、新年度予算、役員人事など5議案が提案通り賛成多数で可決されました。会長に遠藤利男前理事長が就任するなど、新しい理事会体制も同日付で発足、厳しい財務の健全化に取り組むことになりました。

世代交代、活性化めざす

会長ポストは昨年、村尾清一氏が退任後、空席となっていました。70年近い当クラブ史上、遠藤氏は6人目の会長です。新役員の構成は、すでに3月理事会で決議されていましたが、定款で理事の選任は総会決議が必要とされており、今回、理事・監事計三氏の新任が認められたことで、陣容が整いました。

新たに空席となった理事長ポストの人選は残された課題ですが、新体制では常務理事の顔ぶれをほぼ一新して、クラブの一層の活性化を図る狙いがあります。さらに多数の理事から、役員の世代交代を加速すべきだという意向も示されています。

定款で定める理事、監事の任期は2年です。今後の役員人事では、任期の原則をできるだけ尊重して考えることになります。

なお、20数年間にわたり理事、常務理事を務められた太田愛人氏は希望により退任しました。これまでのご尽力に感謝申し上げます。

新しい役員名簿は、43ページに掲載しました。

新役員は次の通り。

（敬称略・五十音順）

理事・秋山秀一（旅行作家、東京成徳大学教授などを歴任）

・堀尾眞紀子（文化学園大学名誉教授、クラブ賞受賞者）

監事・大髙英昭（パソナグループ副会長、トヨタ自動車取締役などを歴任）

本年度予算も成立

例年、日本記者クラブ内でクラブ賞贈呈式と併催される定期総会は、今回は当クラブ室を会場に6月25日、遠藤理事長（会長に就任）を議長として、少数の役員だけが出席するという変則的な形で開催されました。

郵送で届いた議決権行使の書面は136通、議長に対する委任状は52通。会員数（285名）の過半数に達し、総会は成立しました。

議決権行使の書面を採択の結果、2019年度事業報告、同年度決算報告、2020年度事業計画、同年度予算、役員人事の計5議案は提出通り賛成多数で可決されました。

2020年度予算は、総額962万円。諸会費収入が伸び悩むなかで、本年度も全会員を対象とする「特別維持会費」の寄付収入を見込んだうえ、あらかじめ剰余金から70万円を繰り入れて、苦しい編成となりました。

前年度決算、本年度予算の詳細は40、41ページに掲載しています。

混迷の中の灯に

会長　遠藤　利男

新型コロナ感染症拡大の不安の中、私たちは2カ月以上にわたり自粛生活を余儀なくされました。その間私たちの心身には何か大きな変動が起こっているように思われます。そしてこのパンデミック後には、社会も人間の有り様も大変容するだろうと言われています。私はこのような時代にこそ我がエッセイスト達の多様な言説が混迷の中の灯になると思っています。

こうした中で、当クラブの喫緊の課題は二つあります。一つは、長年言われてきた財務の問題の解決です。大不況に陥るだろうと言われている今、他からのサポートは期待できません。私達自らの手で解決する道を探し、実現しましょう。二つ目は、クラブとしての発信力の強化と存在感の向上です。それによって此れからの世界の有り様に貢献出来ればと考えています。いずれにしても多彩な会員皆さんの力が頼りです。

略歴　えんどう・としお　1931年生まれ。NHKで新しいTVドラマの表現に挑戦、70、80年代のドラマ黄金期を担った。放送総局長、NHKエンタープライズ社長を歴任。

「特別維持会費」ご寄付のお願い

今年も会員の皆さまから「特別維持会費」のご寄付を募ります。総会資料でもご説明いたしました通り、クラブの資金運営は一段と厳しくなってまいりました。できるだけ多くの方々のご協力をお願いするしだいです。

当クラブではクラブ賞選考、会報発行、例会開催などの活動を行っておりますが、クラブ収入は会員各位にお納めいただく会費のほか、主に新聞、テレビ、出版など各社からの支援に頼っています。しかし、マスコミ各社の経営環境は依然として厳しく、十分な支援は得にくくなりました。加えて、今年はコロナ禍の影響も懸念されます。

クラブ独自のエッセー集の編集・監修などによる収益も見込めない状況です。会費引き上げも検討課題ですが、当面は任意の寄付をお願いするのが妥当と考えています。「特別維持会費」ご寄付の呼びかけは2013年度以降、6回目です。前回は100名の方々から計約132万円の浄財が寄せられ、クラブ運営に大いに役立てられました。

一口1万円以上で、ご協力くださるようお願い申し上げます。もとよりクラブ役員、クラブ賞選考委員は無報酬ですが、なお一層、クラブ運営の経費節減に努めてまいります。

日本エッセイスト・クラブ
会　長　遠藤　利男
理事会一同

例会について

6、7、8、1月を除く毎月、明宏ビル別館6階のクラブ室で、午後3時から5時まで、ゲストをお招きして懇親の例会を開いています。

例会は、事前にお知らせいたしますが、出欠や予約の必要はありません。この一年間のゲストと演題は次のとおりでした。

2019年9月　秋山　秀一氏
『現在の旅事情
　―旅で出合ったもの』
19年10月　鍋島　高明氏
『相場の神様―古代中国の富豪も
　説く「逆張り」』
19年12月　市川　桃子氏
『漢詩の楽しみ
　―庚信の数奇な生涯―』
20年3月　山本思外里氏
『「予防」より「ケア」へ
　―これからの認知症対策』

新会員のご推薦を
クラブの活性化へ

当クラブの新会員をご推薦ください。クラブの一層の活性化をはかるべく、ぜひ新しい仲間たちを迎えたいと存じます。お知り合いなどで、会員にふさわしい方をご紹介くださるよう、皆さまのご協力をお願いします。

クラブ定款第7条にありますように、正会員となるには、現在の正会員2名以上の推薦を得て、理事会の承認を求めることになっています。

この「2名以上の推薦」という原則は変わりませんが、会員1名の推薦でも、理事会に申請していただければ、審査の対象とします。理事会推薦によって、規約の要件は十分に満たすことができます。

エッセイストの意味合いについては、狭義の随筆や随想だけにとらわれず、評論、ノンフィクションなど幅広い分野を対象にしています。著書や新聞・雑誌などのお仕事を参考に、クラブの趣旨に即して、理事会で審査します。

6月現在の正会員は215名です。従来通り年会費1万5千円で、入会金などは不要です。クラブの運営にとって、会費収入が大きな頼りであることは言うまでもありません。入会推薦の用紙などはクラブ事務局に用意していますが、現在、新型コロナ禍の影響で受付事務など十分な対応がとれませんので、郵便かメールでご連絡ください。

なお、毎年のクラブ賞審査で、原則として正会員の作品は対象外ですが、入会の翌年から5年以内に発表した作品は対象になりますので、申し添えます。

健康保険のご案内 2020年度

当クラブは「文芸美術国民健康保険組合」に加盟しています。加入資格は「当クラブ会員で、文芸、美術および著作活動に従事している者とその家族」です。保険料は組合員の収入の多寡にかかわらず均等です。

本年度の保険料は次の通りです。

本人　月額　1万9千9000円
家族（一人）　1万6000円
介護保険料（満40～64歳まで）
本人・家族　4千300円

医療費の自己負担は本人・家族とも3割、70～74歳の方は2割から3割です。なお、75歳以上の後期高齢者の方は加入できません。

詳細は、文芸美術国民健康保険組合（03-5807-3551）の加入担当へお問い合わせください。

事務局から

ご寄付のお礼

次の会員からご寄付をいただきました。ご芳志のほど、心からお礼申し上げます。（順不同・敬称略）

特別維持会費（19年12月末）
中名生正昭　深尾　凱子
松村満美子　小林　和男

維持会費（20年6月27日まで）
遠藤　利男　佐藤　幸子
岸　恵子　野見山暁治
森本　貞子　澤地　久枝
東畑　朝子　和田　亮介
関　千枝子　中村　政雄
佐橋　慶女　森脇　逸男
尾崎左永子　井上　卓衛
藤原　房子　縫田　曄子
渡辺　綱纜　柳澤嘉一郎
井口　隆史

会員からの寄贈著書

児島宏子氏著『アニメの詩人　ノルシュティン』
臼井和恵氏著『最終の息する時まで　―窪田空穂、食育と老い方モデル』
望月照彦氏著『旅のひらめき　―柔らかく生きる叡知を養うために』
渡辺綱纜氏著『エッセイ集　フェニックスの木蔭』
田中伸尚氏著『一粒の麦死して　弁護士・森長英三郎の「大逆事件」』
山口仲美氏著『現代語の諸相1　若者言葉・ネーミング・テレビの言葉ほか』
鍋島高明氏著『奇才・土佐・啄木…』（12月から6月下旬まで）

※寄贈著書はクラブ室に保管し、会員に限って貸出しています。

2019年度理事会報告

第3回理事会（20年1月23日）
・会員の現況報告
・第68回クラブ賞審査委員および選考日程
・新入会員の承認
・次号会報について
・会報のエッセー執筆者、例会ゲストの人選

第4回理事会（20年4月30日）
・人事について
・2020年度の予算について

第5回理事会（20年5月25日）
・総会の実施方法の変更
・2019年度事業報告
・2019年度決算報告
・2020年度事業計画

エッセーを募ります
会報電子版で社会に発信

会員の皆さまのエッセーを募ります。十年連続10回目の企画です。本来、会報春号で呼び掛けるはずが、少し遅れました。応募作品は、会報冬号（電子版）に掲載されます。締め切りは9月末です。奮ってご応募ください。

冬号が電子版に模様替えして、2年目になります。会報を広く社会に発信することで、クラブの認知度、存在感を高め、若い世代にもアピールするのが狙いです。会報発行にかかわる経費の節減、事務量の軽減にもなります。

応募エッセーのテーマは自由。今年はコロナ禍に直面して、その体験、思いをつづる方もおられるのではないでしょうか。要領は下記の通りです。できるだけ多くの会員の作品を紹介したいと存じます。とりわけ近年入会された方々には自己紹介、近況報告の意味合いもを兼ねて、ぜひ応募くださるように。一方で、2年（2回）連続の応募は遠慮いただいておりますので、よろしくお願いいたします。

なお、当クラブのホームページで、昨年の会報冬号のエッセーがお読みいただけます。

応募要領

一、本文は1600字。

一、本文とは別に、200字以内の略歴を添付してください。

一、できるだけメール添付でお願いします。

一、応募原稿は原則としてご返却いたしません。

クラブ紹介のしおり

日本エッセイスト・クラブの活動を案内するパンフレット（しおり）が事務局に用意してあります。

クラブ創設69年の歴史、クラブ賞選考の変遷などを紹介しています。クラブの活動の周知のため、ぜひご活用ください。

☆クラブ室をご利用ください

会員または会員の関係する団体、グループに限ります。

利用料金は、2時間3000円。超過料金は、1時間につき1000円です。詳細は事務局まで。

☎03―3502―7287

2019年度　会　計　報　告

自2019年４月１日至2020年３月31日

支出の部			収入の部		
勘定科目	摘　要	金　額	勘定科目	摘　要	金　額
給料手当	事務局職員手当	2,640,000	クラブ会費	正会員・法人会員	6,175,000
郵送費	郵送費	420,239	総会等会費	総会・例会会費	266,000
印刷費	会報他印刷費	937,820	寄付金収入	特別維持会費他	2,037,000
会議費	総会等会合費	489,991	雑収入	会報広告代他	134,400
理事・例会費	理事会・例会費用	127,329	受取利息	定期・普通・利息	360
クラブ賞賞金	クラブ賞・賞金	600,000	小計		8,612,760
図書費	クラブ賞審査図書	143,424	監修料		0
交通費	通勤交通費他	134,100	印税収入		0
交際・慶弔費	慶弔費	31,709	還付所得税		0
通信費	電話料	100,123	小計		0
手数料	振替貯金手数料	59,068	繰入金		700,000
賃借料	クラブ借室料	3,434,400			
光熱費	電気・水道料	186,847			
事務費	事務用消耗品費	174,647			
備品費	コピーリース代	11,664			
租税公課	都民税・源泉税	75,000			
福利厚生費	社会保険料等補助	250,000			
雑費		19,835			
予備費		56,488			
小計		9,892,684			
欠損金		▲579,924			
合計		9,312,760	合計		9,312,760

＜注＞予め剰余金から70万円を繰り入れているため、実質的な赤字は127万円余となる。

貸　借　対　照　表

2020年３月31日現在

資産の部			負債及び純資産の部		
勘定科目	摘　要	金　額	勘定科目	摘　要	金　額
現金	手許残高	20,959	基本財産		7,000,000
普通預金	みずほ銀行Ａ	406,056	繰越剰余金		435,498
普通預金	みずほ銀行Ｂ	6,672	預り金		45,000
普通預金	みずほ銀行法人	56,758	当期欠損金		▲1,279,924
普通預金	ゆうちょ銀行	46,129			
定期預金	みずほ銀行	3,000,000			
長期預け金		2,664,000			
合計		6,200,574	合計		6,200,574

2020年５月15日

監　事　藤原　作弥　　監　事　今野　耕作

2020年度予算

収　入

勘定科目	本年度予算(円)	前年度予算(円)	備　　考
正会員会費	3,300,000	3,300,000	会費収入
法人会費	3,090,000	3,250,000	15社
小　　計	6,390,000	6,550,000	
総会等会費	309,000	309,000	総会・贈呈式、例会等会費
寄付金収入	2,000,000	1,900,000	クラブ賞賛助金、維持会費等
雑収入	200,000	200,000	会報広告代、クラブ室使用料
受取利息	1,000	1,000	みずほ銀行（定期・普通預金）
小　　計	2,510,000	2,410,000	
監修料	0	0	
印税収入	20,000	20,000	出版物複写による著作権使用料
還付所得税	0	0	
小　　計	20,000	20,000	
繰 入 金	700,000	700,000	
収入合計	9,620,000	9,680,000	

支　出

勘定科目	本年度予算(円)	前年度予算(円)	備　　考
給料手当	2,640,000	2,640,000	事務局員１名
郵送費	440,000	480,000	会合通知、会報、図書等の送付代
印刷費	750,000	750,000	クラブ会報（年３回）、封筒等
会議費	450,000	450,000	総会・贈呈式会合費等
理事・例会費	130,000	130,000	会合費、例会ゲスト車代
クラブ賞賞金	600,000	600,000	賞金総額
図書費	100,000	100,000	クラブ賞審査図書費
交通費	140,000	140,000	事務局員通勤費等
交際・慶弔費	30,000	30,000	弔電等
通信費	110,000	120,000	電話・FAX・インターネット料金
手数料	55,000	40,000	郵便払込料金（会費）、振込手数料
賃借料	3,450,000	3,450,000	クラブ室賃借料、共益費等
光熱費	170,000	170,000	電気、水道代
事務費	170,000	180,000	事務用品、コピートナー、新聞購読料
備品費	15,000	20,000	コピー再リース代
租税公課	80,000	80,000	法人都民税等
福利厚生費	240,000	250,000	社会保険料等補助
雑費	20,000	20,000	日用品、置き薬代等
予備費	30,000	30,000	
支出合計	9,620,000	9,680,000	

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

（抜粋）

第1章　総　則

（名称）
第1条　この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

（目的）
第3条　当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目的とし、国際文化団体との連携を期する。

（事業）
第4条　当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。
1．会員の相互協力
2．国際文化交流
3．研究調査の発表並びに講演、見学
4．会員相互の親睦と相互扶助
5．クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章　会　員

（種別）
第6条　当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」という。）上の社員とする。
(1)　正会員　当法人の目的に賛同して入会した個人
(2)　法人会員　当法人の目的に賛同して入会した法人
(3)　賛助会員　当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
(4)　名誉会員　当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
(5)　特別会員　当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

（入会）
第7条　正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章　会員総会

（構成）
第13条　会員総会は、すべての正会員をもって構成する。
2　前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。

（会員総会）
第14条　当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならない。

第4章　役員等

（員数）
第20条　当法人に次の役員を置く。
(1)　理事　15名以上25名以内
(2)　監事　2名以上
2　理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によって、理事の中から定める。
3　会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章　理事会

（権限）
第28条　理事会は、次の職務を行う。
(1)　当法人の業務執行の決定
(2)　理事の職務の執行の監督
(3)　会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

第6章　計算（略）

第7章　清算（略）

第8章　附則（略）

役員名簿

会長	遠藤利男	
理事長	（空　席）	
専務理事	秋岡伸彦	
常務理事	栗田　亘 よしだみどり	後藤多聞
理事	秋山秀一	梅津時比古
	中丸美繪	深尾凱子
	藤原房子	降幡賢一
	松田宣子	森永公紀
監事	大髙英昭	今野耕作
事務局長（兼）	降幡賢一	

＊　＊　＊

名誉会長	村尾清一	
		原田國男
		高村壽一
		藤原作弥
		堀尾眞紀子
		森脇逸男

会　員　名

（2020年６月15日現在　285名）
五十音順

あ行

阿川佐和子　阿部菜穂子　青木　賢児　秋尾沙戸子　秋岡　伸彦
秋田　博　秋山　秀一　芥川　喜好　浅川　港　甘里　君香
足立　則夫　荒木　裕志　有馬真喜子　五十嵐佳子　井口　隆史
井上　卓衛　池内　紀昭　池谷　薫　伊野啓三郎　飯塚　恆雄
飯塚　浩彦　石原　美光　市川　桃子　市田　隆文　稲畑　汀子
猪熊　建夫　上田　篤　上野　創　臼井　和恵　臼田　信行
鵜飼　哲夫　内池　正名　内田　洋子　梅津時比古　浦田　憲治
海老沢小百合　榎本　好宏　遠藤　利男　小川津根子　小倉　董子
小澤　秀雄　小塩　節　小曽戸明子　尾崎左永子　尾崎　俊介
及川　直志　大井　玄　大塚　義治　大岩　孝平　大城　浩詩
大空　博　大平　常元　大髙　英昭　大谷　克弥　大槻　茂
大村　智　大宅　映子　太田　愛人　岡　佳津子　岡島　成行
岡田　直敏　岡本　厚　奥山　俊宏

か行

加藤　恭子　加藤　貞仁　柏　澄子　勝方　信一　金森　敦子
金子　光美　亀田　泰武　河合　弘之　川田　志明　川良　浩和
木田　幸紀　北原　歌子　城山　邦紀　儀同　保　菊澤　研一
岸　惠子　岸本　康　北野　栄三　久我なつみ　久谷與四郎
轡田　隆史　倉部　行雄　倉本　宗剛　栗生　將信　栗田　亘
栗山　定幸　黒川　鍾信　古庄ゆき子　小池　光　小谷瑞穂子
小林　和男　小松　浩　児島　宏子　後藤　多聞　後藤　秀機
今野　耕作　紺野　猷邦

さ行

佐々木健一　佐々木　卓　佐々木満里子　佐田　智子　佐藤　きむ
佐藤　幸子　佐橋　慶女　佐保田芳訓　斎藤　勇　齋藤　健
齋藤健次郎　齋藤　博康　柴門　ふみ　坂口　和子　坂本　弘道
澤口たまみ　澤地　久枝　澤藤範次郎　三宮麻由子　志村ふくみ
塩谷　靖子　篠田　桃紅　下重　暁子　下村　満子　杉江　弘
杉渓　一言　杉戸　大作　杉山　武子　鈴木　博　砂原　和雄
関　千枝子

た行

田熊　清彦　田中　充子　田中トモミ　田中　伸尚　田中　秀一
田中　實　田沼　敦子　田村　秀敏　田谷　麗子　田和　潤子
高井　潔司　高木　徹　高榎　堯　髙階　經和　髙島　肇久
高橋　祥友　髙村　壽一　竹内　一正　竹中　淑子　武本　宏一
谷地　快一　谷村　鯛夢　俵　万智　柘野　健次　辻　由美
堤　未果　鶴ヶ谷真一　D・ゾペティ　出久根達郎　ドリアン助川
戸田　桂太　戸田　淳子　鳥羽欽一郎　東畑　朝子　当銘　貞夫
徳田　正幸　富永　孝子　富山　和子　鳥海　修

な行

内藤　啓子　内藤　洋子　中井　幸一　中島さおり　中島誠之助
中野　利子　中名生正昭　中丸　美繪　中村登紀夫　中村　政雄
中村　龍介　中山　士朗　永井　梓　長井　好弘　長田　亮一
長友佐波子　長屋　龍人　鍋島　髙明　並木きょう子　新妻　義輔
二宮　正之　蟐川　真夫　縫田　曄子　野見山暁治

は行

葉山美知子　羽中田　昌　畑　正憲　畠山　重篤　濱邊　祐一
原　彬久　原田　國男　林　望　春原　昭彦　早河　洋
樋口　恵子　深尾　凱子　福田　章　福田はるか　福原　義春
藤原　勇彦　藤原　作弥　藤原　房子　藤原　正彦　船木　拓生
降幡　賢一　古川　治次　古川　浩　穂苅　正臣　細川　俊夫
堀内　丸恵　堀尾眞紀子

ま行

前田　晃伸　牧　久　牧村健一郎　又吉　國雄　町田　邦雄
松田　宣子　松原　眞樹　松村満美子　松本　仁一　萬年　浩雄
三島　利徳　水谷　亨　道川　文夫　道脇　弘俊　南　砂
宮本　倫好　宮崎佳代子　村尾　清一　村松　賢一　望月　照彦
桃井　恒和　森　小夜子　森　孝之　森　武生　森　哲志
森　美可　森永　公紀　森本　貞子　森本　雍子　森脇　逸男

や行

八百板洋子　八木　恭平　八木　美雄　矢吹　清人　安嶋　明
柳生　尚志　柳澤嘉一郎　柳澤　桂子　柳川　時夫　山川　静夫
山形　孝夫　山岸　健　山口　寿一　山口　仲美　山下　健

山藤　章二　　山室　寛之　　山本　一生　　山本思外里　　よしだみどり
養老　孟司　　横山　昭作　　吉野源太郎　　吉原　賢二　　吉行　和子

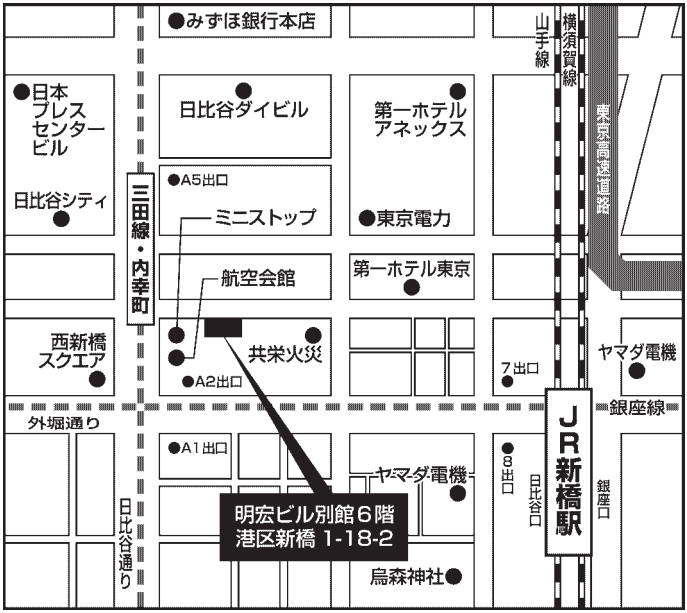
わ行

和田　亮介　　若林　　滋　　脇　　祐三　　渡瀬　昌彦　　渡辺　祥子
渡辺　綱纜　　渡辺　雅隆　　渡辺美佐子　　渡邊　満子

法人会員（順不同）

朝日新聞社
毎日新聞社
読売新聞社
産業経済新聞社
日本経済新聞社
中日新聞社
共同通信社
日本放送協会
TBS テレビ
テレビ朝日
岩波書店
講談社
NHK 出版
KADOKAWA
集英社

日本エッセイスト・クラブ事務局



日本エッセイスト・クラブ
会報 2020夏（No.71－Ⅲ）
2020年7月20日 発行
発行人 遠藤利男
発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ
東京都港区新橋1－18－2
明宏ビル別館6階〒105－0004
電話 03（3502）7287
FAX 03（3502）7288
ホームページ http://essayistclub.jp/
Eメール info@essayistclub.jp
印刷所 （株）TBSグロウディア

古今東西の名著、その核心を読み解く――。大好評の愛蔵版！

NHK「100分de名著」ブックス

定価：本体 各1,000円＋税（★は定価：本体1,300円＋税）　＊各四六判 並製

ドラッカー　マネジメント……上田惇生
孔子　論語……佐久 協
ニーチェ　ツァラトゥストラ……西 研
福沢諭吉　学問のすゝめ……齋藤 孝
アラン　幸福論……合田正人
宮沢賢治　銀河鉄道の夜……ロジャー・パルバース
ブッダ　真理のことば……佐々木 閑
マキャベリ　君主論……武田 好
兼好法師　徒然草……荻野文子
新渡戸稲造　武士道……山本博文
パスカル　パンセ……鹿島 茂
鴨長明　方丈記……小林一彦
フランクル　夜と霧……諸富祥彦
サン＝テグジュペリ　星の王子さま……水本弘文
般若心経……佐々木 閑
アインシュタイン　相対性理論……佐藤勝彦
夏目漱石　こころ……姜尚中
古事記……三浦佑之

松尾芭蕉　おくのほそ道……長谷川 櫂
世阿弥　風姿花伝……土屋恵一郎
万葉集……佐佐木幸綱
清少納言　枕草子……山口仲美
紫式部　源氏物語……三田村雅子
柳田国男　遠野物語……石井正己
ブッダ　最期のことば……佐々木 閑
荘子……玄侑宗久
岡倉天心　茶の本……大久保喬樹
小泉八雲　日本の面影……池田雅之
良寛詩歌集……中野東禅
ルソー　エミール……西 研
内村鑑三　代表的日本人……若松英輔
アドラー　人生の意味の心理学……岸見一郎
道元　正法眼蔵……ひろさちや
石牟礼道子　苦海浄土……若松英輔
歎異抄……釈 徹宗
ユゴー　ノートル＝ダム・ド・パリ　大聖堂物語★……鹿島 茂

NHK出版　〒150-8081 東京都渋谷区宇田川町 41-1　https://www.nhk-book.co.jp
＊お客様注文センター　☎0570-000-321（午前9：30～午後5：30 年末年始・小社指定日を除く）

CLUB